

家族関係と住宅の間取りの研究



後藤礼彦
研究第一部
上席主任研究員

研究の背景と目的

少子高齢社会の到来により、日本の人口は、2006（平成18）年をピークに以後減少に転じ、50年後の2050（平成62）年には現在の2割減の約1億人になるものと推計されている。東京都では、少子高齢化の一層の進行により、2050年には3人に1人が65歳以上になる一方、出生数は現在の3分の2の80万人（死亡数の半分）に減るとされている。このような状況から、将来の日本の都市における生活は計り知れない転換を迎えることが予想される。

かつての大都市圏の住まい方は「緑豊かな子育てに適した住宅」が理想とされ、主に郊外住宅が開発・供給されてきた。しかし、バブル崩壊後、都心部での地価の下落が進み、都心部やその近郊でマンションが大量に供給されるようになった。都心のマンションといえば、DINKSや独身者など都心の利便性を享受したい人が住むというイメージがあったが、現在は子育て世帯も都心近郊に住む状況になってきている。

郊外住宅には「緑豊かな子育てに適した住宅」という理念が存在したが、都心回帰の現象の中では、「子育て」や「家族」よりも「利便性」を住宅購入の重要項目にあげる傾向がある。社会・経済状況が変化し、子供をもつ共稼ぎ世帯も多くなった現状では、通勤等の利便性が優先されることは仕方のない面もあるが、良好な家族関係を構築する上での住宅の重要さが疎かにされる傾向は否めない。

また、「家族崩壊」と表現される「家族の変容」が指摘されているにもかかわらず、従来通りの「nLDK住戸」が供給の中心であり続けているのは、住み手にとって何が重要なのかといった本質が見失われていることを示している。せっかく住宅を購入したのに、家族がバラバラになるといった「家族の孤立化」を進行させ、その結果として、不登校等の問題が発生している。私たちは、未成

年の凶悪犯罪が起きると、その子の家庭環境に原因を求め、生活の基盤である「住宅」が人間性に与える影響というものも少なくないことを再認識する必要がある。

本研究では、子育て世帯に的を絞って、マンションの間取りに潜む動線の問題を分析するとともに、親と子が自然に顔を合わせ、交流が深まるような間取りを検討し、その実現方策を提示することを目的とする。

不登校・引きこもり問題と住宅

学校基本調査と教育白書によると、不登校者数は平成7年から急増し、小学生で2万4千人（児童数の割合で0.3%）、中学生で10万人（生徒数の割合で2.7%）程度となっている（図-1）。

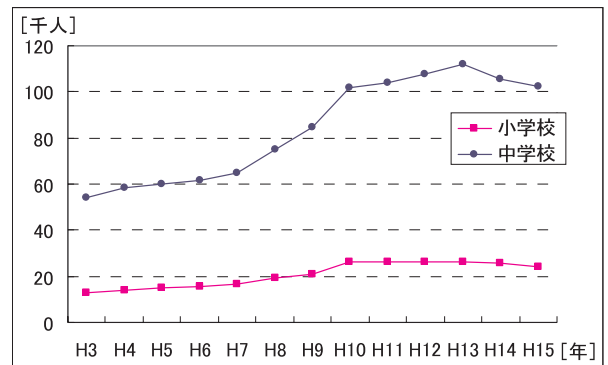


図-1 不登校者数の推移

不登校が問題なのは、登校拒否状態に陥った子供のほとんどが一時期ひどい家庭内暴力を引き起こすことにある²⁵⁾。家庭内暴力の傾向としては、週一回から三回、一回につき一時間前後荒れ狂う状況が多く見られると言う。暴力をふるう相手は主に母親で、父親に当たることは少ないが、家の中の物を目茶苦茶に壊したり、兄弟姉妹にも暴力をふるったりするので、自殺や心中を思いつめる親たちもいる。最近では児童ではなく10代後半から20代のものまでが個室にこもってしまうという状況にあり、「引きこもり」と称して問題視されている。

不登校となる原因を単純に特定することはできないが、

いくつかの具体的な事例を見ると、特に親と子のコミュニケーションに関わる障害が大きな要因の一つとなっているものと考えられる。そして親子のコミュニケーション障害を引き起こす、あるいは助長する要因として、住宅のプランニング、特に間取りに問題があることは否定できない。表-1は登校拒否の状態にある少年50名を対象にしたアンケート調査の結果の一部である。登校拒否児のほとんどが個室を持っており、帰宅時に親に会わずに部屋に入ってしまうことがわかる。また、親と会話する場所として多くが居間と食堂をあげており、居間と食堂がコミュニケーションの場として重要であることがわかる。一方で、夕食や朝食を家族揃ってとる機会が少なく、家族が集う生活習慣が欠如している現状が浮き彫りとなっている。

このことから、不登校や引きこもりといった現代の諸問題を解決するためには、親子間のコミュニケーションに配慮した住宅プランニングが必要とされている。

表-1 登校拒否児へのアンケート調査結果

設問	解答(%)	
1. 個室を与えられているか	はい	98
	いいえ	2
2. 玄関から個室へ入るとき親に会うか	毎日会う	4
	たまに会う	54
	全く会わない	42
3. 最も親と会話する部屋はどこか	居間	42
	食堂	30
	親の部屋	14
	台所	4
	壁越し	4
4. 夕食を家族揃ってとるか	廊下	2
	いつも揃って	18
	平日は別々	50
5. 朝食を家族揃ってとるか	いつも別々	32
	いつも揃って	0
	平日は別々	64
6. 食事のとき話をするか	いつも別々	36
	毎回話す	2
	たまに話す	64
	全く話さない	34

※登校拒否の状態にある少年50名を対象(8歳~18歳)
(松田妙子 著「家をつくって子を失う」より)

家族関係と間取りに関する既往文献

家族と間取りに関する文献の一覧を表-2に示す。子育てを考えたものが多いため、子供部屋に関する考察が中心である。研究者の意見が一致していることは、子供を

引きこもらせない仕組みが大切であり、広く快適な部屋を子供部屋として与えることは良くないということである。子供部屋を否定してはいないが、親が子供に部屋を与える際の約束ごとがなされていないことや、部屋の配置など、日本では子供部屋に対する配慮が欠けているといった指摘がある。表-2にはあげていないが、子供部屋を否定する研究者も存在する。

また、リビングルーム(団らん場)を大切な場所としてあげている研究者も多い。家族が顔を合わせ会話する場、会話が無くてもお互いの気配を感じとれる場が大切であるとしている。

さらには、親子の関係以前に、夫婦の関係が上手くいっているのかを指摘し、夫婦の会話を増やすために、夫婦の部屋を大切にすべきという著作もある。夫婦の間で教育方針を十分に話しあっていないければ、子供を正しく教育できるはずはなく、そういう話は子供の前でしにくいという理由から、夫婦の部屋を重視するべきであると主張している。

その他には、家族は個人の集積であり、個室が重要であると主張する人もいる。家庭内別居、離婚率の増加や、未婚の母の増加など、核家族(標準家族)以外の家族形態の増加により、現実の家族形態を考慮した住宅のありかたも研究されている。

表-2 家族と間取りに関する文献一覧^{1) ~24)}

著者	主張	重視する部屋 (×:重視せず)
外山 知徳	個室が悪いわけではないが、個室化は良くない	リビング
小澤紀美子	「人間形成の場」=「居間」	リビング
宮脇 壇	子供部屋を閉じない	リビング, ダイニング
天野 彰	子供に必要なのは個室ではなく、場である	リビング
田中 恒子	子供部屋と玄関を結ぶ動線上にリビングがあること	リビング
横山 彰人	子供部屋の居心地を悪くさせる	リビング
清家 清	夫婦の部屋はスキンシップの場	リビング、夫婦 (×個室)
藤原 智美	「公」と「私」が必要である、夫婦が一番大切	夫婦
広原 盛明	個の領域とそれをつなぐ空間が大事	その他
山本 厚生	自分はこうすみたいという確かな生活意識を持つこと	その他
黒澤 隆	(n+1)LDK	個室 (×リビング)
芹沢 俊介	個別化が必要	個室

子育てに配慮した理想的なプランとは

住宅の間取りを設計する際には様々な要因を考慮しなければならないが、本研究では親と子の交流を重視し、先の既往文献を参考にして、特に以下の3つのポイントに着目する。

- ①家族の交流の場所としてリビングを重視する
- ②子供部屋を最優先しない
- ③リビングと個室（子供部屋）の動線を交わせる

これらを基に従来のマンションの間取りを検証するとともに、子育てに配慮した理想的な間取りの提示を試みる。

1 従来のnLDKプランを読み解く

現在一般的に供給されているマンションの間取りは、総称してnLDKと呼ばれている（図-2）。nは個室の数を表している。

現在の間取りの特徴は以下の点である。

- ・リビングがバルコニー側にある
- ・奥行きが深く、間口が狭い
- ・空間を細かく仕切って個室の数を確保する
- ・玄関→廊下→個室・LDKという動線計画である



図-2 従来のnLDKプランの例

このような特徴をもつnLDKマンションがここまで普及した主な理由を以下に示す。

①太陽信仰とリビングのプライバシー重視

日当たりは日本人が住宅に求める第一の条件であり、購入時の人気を決定する重要な要因となっている。また、集合住宅で問題となるプライバシーについては、特に生活の中心となるリビングのプライバシーを重視する傾向にある。従って、リビングは南に面するバルコニー側に配置される間取りが一般的となる。

②個人のプライバシー重視=個室の確保

家族と言えども個人のプライバシーを守ることが大切であるとされ、家族それぞれに個室を確保することが一般化した。狭い住戸を細かく仕切り、狭くても必要な個室数を確保しようとする傾向にある。

③経済性の重視=面積を有効に利用できる住戸配置

敷地に住戸をより多く集積するためには、単純な形状で片側廊下の住棟形式が有利である。さらに、南に面した住戸をより多く配置するために、間口が狭く奥行きが深い住戸形状となる。

以上の結果、玄関から廊下を經由して個室、リビングにアクセスする一般的なnLDK形式の間取りが確立したと考えられる。

市場の仕組みもこのようなnLDK形式のマンションを定着させた要因の一つと考えられる。想定される家族構成から3LDK（n=標準家族4人-1人 [夫婦で1室]）の供給量が多くなるが、入居する世帯人数にかかわらず消費者は3LDKを選ぶ傾向がある。市場の仕組みで見ると、まずみんなが3LDKを買っているから、3LDKなら安心だからという「消費者側の循環」がある。一方、3LDKが売れている、ならば3LDKを供給しようという「供給者側の循環」がある。この2つの循環により、3LDKが供給の中心を占めているという実態がある（図-3）。

現在のnLDKプランは、先に示したとおり、子供がリビングに足を運ぶ前に個室に入ることが可能な間取りである。この動線では、親がしっかりと子供に約束ごとを与えない限り、親と子の交流を減少させてしまう恐れがある。また、交流が少ない家族に対して、引きこもりを容易にする環境を住空間が予め提供することになる。

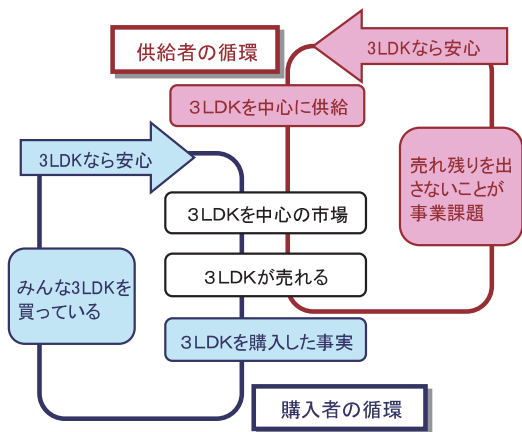


図-3 3LDKに集中する市場の仕組

2 リビングアクセス

一方、欧米などの標準的な住宅では、玄関からリビングを通して各部屋に到達する間取りが多い。このように、玄関→LD→個室という動線計画をもつ住宅プランをリビングアクセス型と定義する(図-4)。

リビングアクセス型は、子供が玄関から直接個室に引きこもることを可能とする従来の間取りの欠点を解消することができる。親が子供に約束ごとを与えなくても、必然的に親と子が顔を合わせる形になっている。また、家族の生活動線がリビングで交わるため、家族が自然にリビングへ集まるような仕組みが形成され、親が子供の気配を常と感じ取れるという効果が期待される。

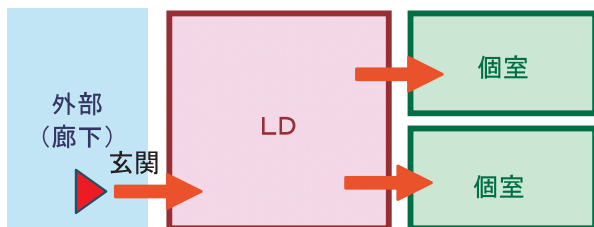


図-4 リビングアクセス型の概念図

このように、子育てに配慮した理想的な間取りとして、ここではリビングアクセス形式のプランを提案したい。これまで重視されてきた住宅の条件(日当たり、プライバシー、経済性等)を踏まえつつ、このリビングアクセスを如何に実現するかを以下で検討する。

リビングアクセスプランの実現方策

現在のnLDK住宅をリビングアクセスにする方法を検討する上で2つの点に留意したい。一つは、現在のnLDK住宅からあまりコストアップにならないようなものにするのである。もう一つは、ユニバーサルデザインに対応できることである。従って、メゾネットタイプや階段室型での検討は行わないこととした。

本報告では、リビングアクセスプランにするための方策として、以下の2つを提案する。

1 第1案：間口広形式

第1案は住戸の間口を広くし、奥行きを狭くする方法である。この案の利点は以下の点にある。

- ①プライバシーの高い方向に多くの開口部を持つことができる。
- ②居室の採光の制約が小さくなるので、部屋の配置の自由度が高くなる。

これらの利点により、リビングアクセスとしながらリビングのプライバシーや快適性(採光など)が確保できる。(図-5)



図-5 間口広形式の例

間口を広くしたプランを採用するための住戸配置については、一般的な配置(図-6)と同等の経済性を実現する方法として、雁行形式(図-7)やツインコリドール形

式（図-8）が考えられる。

雁行形式は現在でも高価格帯のマンションの配置として用いられることがある。利点は、中間の住戸でも2面採光が可能となることである。ただし、桁行き方向の構造の合理性が失われるので、躯体断面が増加し、コストアップの要因となる。

ツインコリドール形式では、玄関側居室の環境は対面する住戸との離隔距離に依存する。環境を良くするためには離隔距離を広げる必要があるが、コストは増加してしまう。一方、離隔距離をなくせば中廊下式となり、コスト面では片側廊下形式と同等になるが、玄関側居室の環境の悪さと、南北に長い敷地でないと成立しにくいといった欠点がある。

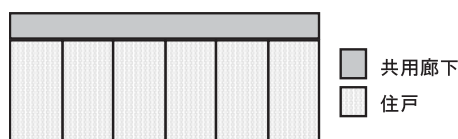


図-6 一般的な住棟形式（片側廊下形式）

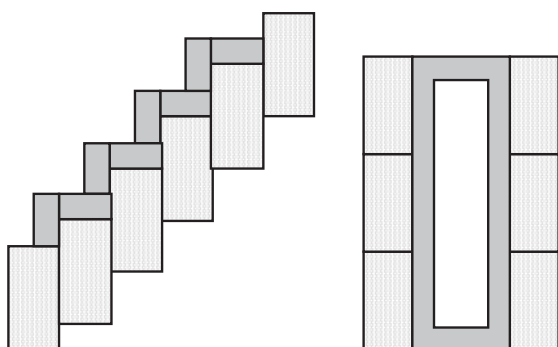


図-7 雁行形式 図-8 ツインコリドール形式

2 第2案：廊下修正形式

第2案は共用廊下側に視線の緩衝帯を設ける方法である。この利点は以下の点にある。

- ①比較的经济性の高い住戸配置が可能である。
- ②全戸南向きの住戸配置が可能である。

欠点は、LDを南側に配置できない点と、第1案に比べてプライバシーが低くなる点である。本案を実現する方

法として廊下修正形式が考えられる（図-9）。この形式も高級志向のマンションでは既に採用されているが、あくまでも廊下側（玄関側）のプライバシーを高めるために採用されており、プランは従来のnLDK形式を採用するものがほとんどである。

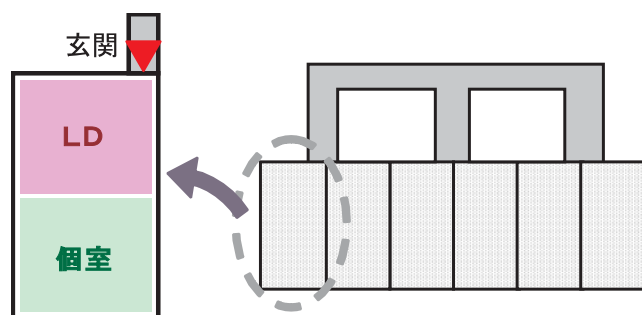


図-9 廊下修正形式

3 普及方法

先に述べたように、新しい間取りの商品を売り出しても、市場の原理が働いて、普及させるのは困難な状況にある。実際に従来のnLDKにとらわれないマンションを実験的に売り出しても人気はいま一つの状況であり、民間の住宅供給会社にとっては、売れ残りの危険が伴う。

この状況を打開するためには、やはり購入者側の意識改革が必要である。購入者に、日当たりやプライバシーといった従来の基準だけで住宅を考えるのではなく、自分たち家族にとってどういう間取りが理想であるのか、リビングでの団らんを増やすにはどうするのかを真剣に考えてもらう必要がある。南面のリビングをあきらめればツインコリドール形式が可能になり、プライバシーを過度に重視しなければ廊下修正形式も可能となるのである。

購入者の意識改革のためには、出版物の発行や講演会などにより建築家や研究者が間取りの重要性を訴え、広く世に知らしめることが重要である。

また、先進的な取り組みは公的機関が担わざるを得ない面もあり、都市再生機構や公営住宅による供給を推進し、リビングアクセスの良さを理解する機会を与えていくことが期待される。

おわりに

両親は子供の成長のためによりよい環境を与えてやりたいと思い、住宅を購入し、子供部屋を与え、そして、新居のリビングで家族と団らんすることを希望している。しかし、いざ住宅を購入し、子供に個室を与えたために、家族がばらばらになってしまうというのはとても残念なことである。現在、広く流通しているnLDKと呼ばれるマンションのプランでは家族の交流を妨げる動線になってしまうため、子供は家族団らんのためのリビングに足を運ぶことなく玄関から子供部屋へ直行し、親と子が顔を合わせることもない状態が発生してしまっている。

このような状況を避けるために、住宅から取り組める方策の一つとして、リビングアクセス型（玄関→LD→個室）の間取りを考察し、実現可能な方法の提案を試みた。子育て世帯住宅の最も重要な点は、自然に家族が顔を合わせる機会が増えるような動線計画とすることであり、家族が孤立化する動線計画は避けるべきである。また、nLDKマンションであれば、夫婦の部屋、子供部屋の位置を慎重に選び、可能な限り子供の動きが把握できるようにする必要がある。

また、子育てを家族内の問題と捉えるのではなく、社会とのつながりの中で捉えるならば、住宅内部の間取りだけでなく、近隣を含めた住環境も非常に大切な要素である。安心して暮らせる防犯性が高い街並みにするためには、近隣のコミュニティが大切であり、豊かな住環境を実現するためには、近隣との交流が促進される住戸計画を考える必要がある。

さらに、夫婦の視点で家族関係と住宅との関わりを考えてみると、子育ては家族にとって限られた期間であり、夫婦二人だけで過ごす期間の住まい方についても考える必要がある。現在、高齢者になって郊外の住宅に住み続けることに不安を覚え、都心のマンションに住み替える人たちも出てきている。家族のライフサイクルにあわせ、子育て世帯が戸建てに住み、単身や夫婦のみの世帯などがマンション等に住むなどの住み分けの可能性を探

ること、それぞれに適した住宅プランとはどのようなものか等、もっと大きな視点から考える必要がある。

参考文献

- 1) 外山 知徳、1985年、「住まいの家族学」
- 2) 小澤紀美子、1987年、「豊かな住生活を考える一住居学」
- 3) 宮脇檀、1987年、「新・3LDKの家族学」
- 4) 宮脇檀建築研究室、1987年、「宮脇檀の住宅設計ノウハウ」
- 5) 清家清、山下泉、森下清子、1992年、「新しい時代の豊かな住まい方—家族・家庭・地域・環境を考えた住生活」
- 6) 野々山久也、1994年、「家族ライフスタイルの多様化への潮流（都市住宅学 第6号）」
- 7) 伊東康子、1994年、「現代家族と住居のゆくえ（都市住宅学 第6号）」
- 8) 早川和男、岸本幸臣、鈴木晃、1996年、「講座 現代居住〈2〉 家族と住居」
- 9) 黒沢隆、1997年、「個室群住居—崩壊する近代家族と建築的課題」
- 10) 藤原智美、1997年、「家をつくるということ—後悔しない家づくりと家族関係の本」
- 11) 天野彰、1998年、「家族関係をよくする家づくり」
- 12) 清家清、1998年、「ゆたかさの住居学—家族を育む住まい100の知恵 やすらぎの住居学」
- 13) 田中恒子、大江忍 他、1998年、「家族と健康にやさしい住まい—家づくりは夢づくり」
- 14) 金貞均、2000年、「少子化における子育てとネットワーク居住（都市住宅学 第29号）」
- 15) 藤原智美、2000年、「家族を「する」家」
- 16) 横山彰人、2001年、「子供をゆがませる間取り—家族がうまくいく家づくりの知恵」
- 17) 篠原聡子、大橋寿美子、小泉雅生+ライフスタイル研究会編、2002年、「変わる家族と変わる住まい〈自在家族〉のための住まい論」
- 18) 上野千鶴子、2002年、「家族を容れるハコ家族を超えるハコ」
- 19) 山本厚生、2002年、「住まいづくり考—家族像の不確かな時代に」
- 20) 広原盛明、高田光雄、岩崎信彦、2002年、「少子高齢時代の都市住宅学—家族と住まいの新しい関係」
- 21) 藤原智美、2002年、「住まいから家族をみる NHK人間講座」
- 22) 藤原智美、2003年、「たたかうマイホーム—住まいの現在、家族の未来」
- 23) 鈴木成文他、2004年、「『51C』 家族を容れるハコの戦後と現在」
- 24) 山本理顕、2004年、「新編 住居論」
- 25) 松田妙子、1998年、「家をつくって子を失う」